

明治神宮と「和魂洋才」*

著者：朴奎泰（漢陽大学校）

翻訳者：片岡龍（東北大学）

I. 近代神道の象徴、明治神宮

日本の近代化を達成した明治時代の年号は、言うまでもなく明治天皇から始まったものであり、この意味で明治天皇は近代日本を代表する象徴の一つと言える。同様に明治天皇と昭憲皇太后を祭神として祀った明治神宮は、近代神道を代表する象徴的空間とすることができる。近代神道の顕著な特徴として、特定の間を祭神として祀った創建神社を欠かすことはできないが¹、明治神宮はその中でも、天皇を祭神として祀った創建神社²の「特別な」事例とすることができる。

なぜ特別なのか？その理由として、何よりも明治神宮は他の創建神社とは異なり、内苑と外苑という二元的構造によって構成されているという点が挙げられる。1920年、現在の東京都心部の渋谷区代々木に建立された明治神宮は、神社建築を基調とした内苑と、西洋式の公園である外苑と、両者を結ぶ参拝路（表参道）からなる宗教=文化複合空間である。このうち別名「代々木の杜」と呼ばれる70万平方メートルの内苑は12万本（365種）の献木からなる人工林で、しばしば神道の鎮守の森の理想型とも言われる。また、内苑の明治神宮本殿に通じる道には、日本最大級の木造の鳥居が立っている。一方、外苑の場合は、東京都内で最も美しいと定評のある銀杏並木の北端（南端は銀杏並木と垂直方向に走る青山通り）の真正面に＜聖徳記念絵画館＞と明治天皇の葬場殿趾が位置し、その左側には尚武の気風を奨励した明治天皇の意を奉じ＜国立競技場＞（旧明治神宮外苑競技場）と神宮球場をはじめとする各種スポーツ施設が並び、その右側には明治天皇が大日本帝国憲法を發布した＜明治記念館＞（旧憲法記念館）が配置されている。

このような明治神宮に関する日本最初の本格的な研究書である山口輝臣『明治神宮の出現』は、明治神宮の成立過程を、近代日本において公園が神社境内に登場するようになった現象と結びつけている。この時、彼は明治神宮を靖国神社とともに近代日本の東京に新たに作られた「近代的神社」と規定し、徳富蘇峰の言葉を借りて「明治神宮の出現こそ実は東京遷都の完成であった。」（山口輝臣、2005：201と210）と解釈する。これは明治神宮が明治天皇と並んで、日本の近代性と結びついた重要な象徴として認識されていることを示している。

本稿の目的は、「神道と土着的近代化」というテーマと関連して、日本の近代性の一象徴である明治神宮の二元的空間構造と構成原理に内包された含意および意義を、特に「和魂洋才」と呼ばれるモットーと結びつけて究明することにある。この時「土着的」という修飾語は多様な観点から理解可能だが、ここではそれを最も常識的な意味で「日本的」という言葉と等値させようと思う。そうする時、「土着的近代化」という言葉と和魂洋才という標語はかなりの部分一致することになる。以下の議論では、「土着的=和魂、近代化=洋才」

という基本図式とともに、両者の相互重層性あるいは交差性に注目しようと思う。

II. 土着的近代化の記号、和魂洋才

和魂洋才の辞書的定義として、たとえば「《「和魂漢才」の類推から明治になってできた語》日本人が伝統的な精神を忘れずに西洋の文化を学び、巧みに両者を調和させること。」(小學館、『デジタル大辞泉』)、「日本人としての精神を堅持しつつ、西洋の学問・知識を受け入れること。」(『大辞林』第3版)、「和魂」は日本固有の精神のこと。「洋才」は西洋の学問に関する才能や知識のこと。」(『新明解四字熟語辞典』)などを挙げることができる。このような辞書的定義は、和魂洋才の原型が和魂漢才にあり、近代期に及んで、その適用対象が「カラ」(韓、漢)から西洋に置き換えられた側面があることを示唆している。

和魂漢才は平安時代中期に生まれた概念であるが、当時は「やまとだまし・からざえ」と読んだ。この時の和魂漢才は、韓半島と中国到来の先端知識も重要だが、日本社会の常識にしたがって臨機応変的な措置をすることができる資質も重要である、言い換えれば専門的知識[漢才]と教養[和魂]³を兼ね備えなければならないという意味で使われた。『源氏物語』、『大鏡』、『今昔物語』などに、このような用例を見出すことができる。その後、鎌倉時代後期のモンゴル襲来にともなう神国思想の台頭により、和魂の意味内容に最初の重要な変化が生じる。たとえば、室町時代に成立した『菅家遺誠』は和魂漢才の兼備を力説しつつ、神国日本と中国の違いを強調している⁴。これは中世の日本人が中国的なものを受容するにあたって日本的な特性に注意しなければならないという自覚を示すものだが、その後、国学の台頭する近世以降になると、和魂は日本人に共通する心性としてその意味が拡張された。

和魂の意味は幕末期から明治期にかけて再び大きく変化した。この第二の変化は、最初の変化よりも決定的である。たとえば吉田松陰(1830-1859)が実兄[杉梅太郎]に送った1854年(安政1)12月8日付書簡で、「かくすれば かくなるものと 知りながら やむにやまれぬ 大和魂」(山口縣教育會編、1935:271)と言う時の和魂は国のために命を惜しまない日本民族特有の気概あるいは精神を意味したが、これが軍国主義とともに昭和時代まで広く行き渡った。しかし、このような意味の和魂が定着するまでの過程は、非常に多様で複合的な様相をもって展開した。

たとえば、「日本で国家的、社会的に有用な人材になるためには和魂洋才でなければならない」と力説しながら、ヨーロッパの近代個人主義思想を受容した森鷗外(1862-1922)は、和洋の学問の両方に精通した人物として、平安時代以来の和魂漢才的発想を踏襲して、和魂洋才を推奨した。しかしその実質的な内容は、西洋文化の摂取とともに、さらにそれと日本文化の融合を説く一種の「洋魂洋才」的発想を含んでいた。

森よりも半世紀先立って活動していた横井小楠(1809-1869)は、堯舜時代の政治を理想視しながら、「漢魂」に立脚して日本の独立維持を図った思想家であった。彼は「今や天徳に則り^{のつと}聖教に^よ拠り、万国の情状を察し利用厚生大に経綸の道を開ひて、政教を一新し、富国強兵^{ひとえ}偏に外国の侮を禦^{ふせが}がんと欲す。敢て洋風を尚ぶにあらず」(「國是三論」、山口宗之

校注、1971：450)として、東洋の道德(天徳、聖教)を打ち出して「洋魂洋才」については、厳格な警戒の態度を示した。

一方、佐久間象山(1811-1864)は、「東洋道德、西洋芸術、精粗遺^{のこ}さず、表裏兼該^{けんがい}し、因りてもって民物^{みんぶつ}を沢^{たく}し、国恩に報ゆる」(『省譽録』、植手通有校注、1971：244)と言ったが、この時の東洋道德は「東道西器」の「東道」と同様に、朱子学的な格物致知説に立脚したものだ。さらに象山は自分が追求した蘭学を「西洋の窮理の学問」と理解した⁵。このような「東洋道德、西洋芸術」という標語が、後に和魂洋才というモットーに転化したと見るのが通説だが、厳密に言えば、その実質的な内容は漢魂洋才により近いものだった。

幕末の志士である橋本左内(1834-1859)⁶も1857年(安政4)10月21日付けの村田氏壽に送った書簡で、外国貿易において国民が持つべき心構えについて「わが国の美しい君臣関係や武士の勇敢勲励の気風を西欧諸国に提示して、[仁義之道、忠孝之教]を当方から積極的に公開すべきである。逆に、[器技之工、藝術の精]は西欧諸国から積極的に導入するようにすれば、西欧諸国はわが国のことをしっかり心にとめて行動するであろう。」(別所興一、2003年：410から再引用)と言い、象山とほぼ同様の立場を取った。

これに反し、「西洋の文明は我国体を固くして兼て我皇統に光を増すべき無二の一物なれば、之を取るに於て何ぞ躊躇することをせんや。断じて西洋の文明を取るべきなり。」(『文明論之概略』、戸澤行夫編、2002：48)と主張した福沢諭吉(1835-1901)は、最も積極的な「洋才」論者だったと言える。この時、彼にとって洋才は単なる手段ではなく、和魂(国体)と表裏一体をなすものであった。たとえば彼が「文明の外形はこれを取るに易くその精神はこれを求めるに難し...欧羅巴の文明を求めるには難を先にして易を後にし、先ず人心を改革して次で政令に及ぼし、終に有形の物に至るべし。」(『文明論之概略』、戸澤行夫編、2002：29-30)と言うとき、そこにわれわれは洋才と洋魂の分離不可能性に対する認識を読み取ることができる。福沢にとって和魂洋才は分離することのできない複合体と見なされた。そこに「漢魂」が介入する余地は全くなかった。「物ありて然る後に倫あるなり、倫ありて然る後に物を生ずるに非ず。臆断を以て先ず物の倫を説き、その倫に由て物理を害する勿れ。」(文明論之概略、戸澤行夫編、2002：67)という福沢の有名な発言は、「漢魂から洋才への転回」⁷をよく示している。

理学宗という自然科学の宗教を提唱した杉浦重剛(1855-1924)⁸は、道理より物理の先在性を強調したこのような福沢の観点を極端な法式によって発展させた⁹。彼は仁義礼智信の徳目や喜怒哀楽の感情までもエネルギーの一種と理解しながら当代物理学の最新理論を通じて、人間社会と世界の原理を説明できると考えた。彼はこのような理学宗に立脚して、「他の国は知らず、我日本杯に於ては理学の空気充滿すれば、到底入り込むこと能はざるべしと」(「所謂理學宗」、明治教育史研究會編、1983b：223)と言い、西欧の近代性の背後に敷かれている洋魂としてのキリスト教を極力排撃した。そうして最も望ましい国家上のモデルを、水素と酸素が化合して水となるような化学的結合に求めようとした。「国家内の各個人が其個人的利益を後にし、国家的利益の為に結合する」(「混合と化合」、明治教育史研究會編、1983a：377)化学的国家がそれである。杉浦はそのような国家において日本

人が守るべき3つのこととして、「皇室の万世一系」「日の丸の旗」「富士山」（「日本の三絶」、明治教育史研究会編、1983b：162）を挙げている。要するに、杉浦の言う理学宗は科学絶対主義[洋才]と国家絶対主義[和魂]の奇妙な化学的結合の生んだ産物と言える。そこに私たちは、「洋才から和魂への復帰」を読み取ることができる。

「漢魂→洋才→和魂」という大きな流れは、やがて田中智學（1861-1939）の国体言説に至って、神的権威を付与された和魂として現れるようになる。明治天皇を「国体の化身[権化]」（田中智學、1943）または「天照皇太神の散体」「神武天皇の再現」「国体」「日本」「道の主」「教の師」「民の親」「国家及人類の聖標」（田中智學、1927：44）などとして絶賛する田中は「昔の「和魂漢才」、今の「和魂洋才」、それをもつと拡大充実に、「神魂世才」（神代魂世界才）としなければならぬ。」（田中智學、1927：33）と言う。ここで「神魂世才」とは、神代の魂と世界の才を指す。しかしこの時の世界は普遍的な意味を持つものではない。それは人類と世界の模範としての大和民族と日本を前提とする国体論的概念であった。

高坂史朗は『近代という躰き』において「和魂洋才の図式の力点は『洋才』にあり、和魂に実質的意味はないのではないか？」という大胆な問いを投げかけながら、「西洋諸国の軍事優越を知った洋才論者が当時の政治的状況に鑑みて攘夷論者の非難をかわすために、偽装として和魂を提示したものであり、本来の意図は洋魂洋才にあったもの」（高坂史朗、2007：27）と主張する。近代日本の精神状況が極端な国体論に傾くようになった原因は決して単純明瞭ではないが、和魂洋才自体に内包されたこのような曖昧な隠蔽性もその重要な要因の一つではないかと思う。要するに和魂洋才の多様な表出は、それを「トランスナショナリズムとしての東西折衷論」（シン・ヒョンスン、2010）、「折衷主義的近代化論」（イグァンレ、2005：476）などとする一般的な観点からも垣間見られるように、和魂と洋才の相互浸透的、可変的な性格を示唆する。そこで和魂、漢魂、洋魂の境界はしばしば不透明で、相互召喚的だ。この点を念頭に置きながら、明治神宮と和魂洋才の問題を考えてみることにしよう。

Ⅲ. 明治神宮造営と和魂洋才

1. 明治神宮の造営過程

1912年7月30日、明治天皇の死亡が発表された日から「東京に陵墓を」造ろうという運動が展開した。しかし、陵墓が明治天皇の生誕地である京都の桃山城跡に定められ、東京の青山練兵場で葬儀をすることが決まると、明治天皇を祀る神社創建運動が起こるようになる。その端緒を開いたのは2週間後の8月12日、東京居住の今泉定介ほか2名による「明治神宮を青山練兵場に建設することを希求する請願」であった。ここで青山練兵場に社殿と公園を建設し、その費用は国庫によって充当することが提案された。

その1週間後、後に日本資本主義の父と呼ばれるようになる渋沢栄一（1840-1931）、阪谷芳郎（1863-1941）東京市長、中野武管東京商工会議所会長などが「明治神宮建設ニ関スル覚書」（以下「覚書」）を発表する。この最初の明治神宮計画案は神宮を内苑と外苑に分け、それぞれ国費と国民献金によって建設すること、内苑は代々木御料地に、外苑は青山

練兵場に作ること、外苑に頌徳紀念ノ宮殿と臣民の功績を表彰する陳列館及びその他、森と噴水台などの設備を用意することなどを提案している。これにより 8 月 15 日に内務省が「明治天皇奉祀神宮創設に関する件」を内閣に提出し、11 月 22 日に大正天皇の裁可が下された。

同年 12 月 20 日に「神社奉祀調査會」（以下「調査会」）が設置され、翌 1914 年 1 月 15 日に「調査会」は明治神宮の建設位置を東京に、そして 2 月 15 日には代々木を鎮座地として決定した¹⁰。さらに「調査会」は、「神社奉祀調査會特別委員会」（以下「委員会」）を設置し、委員長に渋沢と阪谷を任命した。「委員会」は、同年 6 月に「覚書」の内容を具体化した全 15 件の「調査会特別委員会報告」を政府に提出した。これによって、神宮の名称は明治神宮に、例祭日は明治時代の天長節（明治天皇の誕生日）である 11 月 3 日に決まった。

こうして 1915 年 4 月 30 日、政府は内務省の中に神宮建立を担当する部署である「明治神宮造営局」（以下「造営局」）を設置して伏見宮^{きだなる}偵愛親王を総裁に任命した。これにより明治神宮の造営作業が具体的に進み始めた。「造営局」は 18 歳から 24 歳までの青年によって構成され、各地方の「青年団」を募集して 50～60 人単位の団を結成し、それぞれ 10～15 日程度ずつ明治神宮造営の土木事業に従事させた。この自発的な「青年団」には内苑に総計 209 団体、約 11 万人が、外苑に 108 団体、約 4 万 3 千人が参加した¹¹。

一方、1914 年 12 月 14 日に渋沢を委員長とする「明治神宮奉賛会創立準備委員会」が発足した後、翌 1915 年 9 月 6 日には伏見宮^{きだなる}偵愛親王を総裁として東京の有志による民間団体として造営運動の母体となった「明治神宮奉賛会」（以下「奉賛会」）が成立し、会長に徳川家達^{いえさと}、副会長に渋沢と阪谷がそれぞれ就任した¹²。「奉賛会」は特に外苑造成のための国民募金運動¹³を陣頭指揮する一方、神宮造営のためにヨーロッパに人を派遣した。たとえば欧米各国の都市計画と公園を調査するために派遣された折下吉延^{おりしもよしのぶ}は 8 ヶ月間のヨーロッパ視察を終えて帰国した後、有名なイチョウ並木をはじめとする公園としての外苑を作った。またフランスのルーヴル美術館に派遣された画家の寺崎武男は 3 年余にわたって壁画保存法と陳列法などを学んで、戻ってくると後述する外苑の「聖徳記念絵画館」の陳列と維持に主導的な役割を果たした。

2. 内苑と外苑の和魂洋才

内苑の社殿を設計した伊東忠太（1867-1954）は「日本建築史」という分野の開拓者であり、また橿原神宮、宮崎神宮、豊國廟、平安神宮、高麗神社、湯島聖堂、靖国神社神門及び石鳥居、台湾神宮、樺太神社、朝鮮神宮などの設計者でもあった。彼は明治神宮の設計に先立ち、西洋の代わりに中国を旅行して東洋的建築様式からインスピレーションを得ようとした。これは一面において和魂漢才の伝統を連想させる。彼は世界の建築史が木造から石造に進化してきたことをよく知っていた。明治神宮の社殿様式と関連して、当時阪谷をはじめ西洋式（明治式）社殿建築を主張する一連の流れがあったが、伊藤は「古来の日本建築の形式を根拠にして、それを適切に変形させることができる。」¹⁴と言い、材料とプランは洋式に変更可能だが[洋才]、スタイルだけでは日本的でなければならない[和魂]と主張した。これによって伊藤は明治神宮の社殿様式を、流線的に流れる屋根の形の流造木造

建築物に決めた。古来より代表的な神社の様式としては、流造のほかにも上代からの神明造や近世以降の権現造などがあるが、その中でも流造は平安時代以来、当代に至るまで全国一般の神社に最も多く普及した「普通様式」として国民にとって最も親しみのある様式だったからである¹⁵。

このように内苑の前が最も伝統的な流造形式[和魂]で作られたのに比べ、内苑の森は西洋の先端学問と技術が総動員されて造成された人工林[洋才]である。実はこの森自体が和魂洋才を表象する。それはまさに和魂の神道的象徴とすることのできる鎮守の杜を示すためである。その鎮守の森を構成する主要な樹種はクスノキ、シロカシ、スダジイなどの常緑広葉樹であるが、これは大都市東京の気候風土や煤煙などの環境要因を考慮した樹種栽培という新しい生態学的知識を導入した結果だった。鎮守の森の森厳さを構成する主力樹種を、従来の針葉樹から広葉樹へ転換させたのは、価値転換そのものだった。日本各地および朝鮮と台湾から調達された献木 365 種、約 12 万本によって構成されたこの内苑の人工林は、本多静六(1866-1952)、本郷高德(1877-1945)、上原敬二(1889-1981)等の林学と造景学の専門家によって造成された。(今泉宜子、2013: 118-166 参照)

第一に、日本の林学の父と呼ばれる本多静六は、幼少時に漢学と英語を学び、17歳の時に東京大学農学部的前身である東京森林学校¹⁶に入学した。その後1890年から2年間のドイツ留学を終え、日本最初の鉄道防雪林と大学演習林を造成し、さらに日本最初の西洋式公園である日比谷公園を設計した。特に注目すべきは、彼が1899年、その土地の気候風土に最も適した樹木を栽培する生態学的理論である「日本森林植物帯論」によって、日本最初の林学博士号を取得したという点である。「造営局」顧問に就任した当初は、針葉樹こそ鎮守の森の雄壮さを醸し出し出すという立場から、東京に明治神宮を建ててはならないと主張した。しかし同じ埼玉出身である渋沢の懇切な依頼にしたがって、東京内の人工林造影側に立場を転換したのである。

第二に、本郷高德は、「日本の森林を育成した人物」である師匠本多静六と弟子である「日本造園学の創始者」上原敬二をつなぐ輪の役割を果たした人物として位置づけることができる。つまり彼は、林学と造園学の架橋であり、またドイツの林学と日本の社寺林苑の架橋である明治神宮内苑の設計と植栽計画に際して、立案から実際の造成事業の全過程において最前線にいた人物だった。したがって、明治神宮の鎮座地である東京の環境要因を考慮して広葉樹の森づくりという計画を立案した人物が本多静六だとすれば、その下で実行に移したのがまさに本郷だったのである。幼いとき寺子屋で学んだ本郷は、15歳のとき東京英語学校に入学して当時の校長であった杉浦重剛から英語を学び、1897年に東京帝国大学農科大学に入学して本多静六の下で勉強した。その後1906年から4年半にわたるドイツ留学において最優等の成績で博士号を取得した後、帰国して「造営局」技士となった。師匠の本多に継いでドイツの森林美学を日本に移植した彼は、『社寺の林苑』に「林生の生々発展によつて表現された清浄、厳肅なる、自然そのまゝの林相こそ最も貴ぶべきもの」(今泉宜子、2013年: 153から再引用)と書いているが、これは森林の美的価値を重視した明治神宮の林苑計画が、当時のドイツ造林学から強い影響を受けたことをよく示している。

第三に、上原敬二は1911年に東京帝国大学農科大学に入学して本郷に林業を学び、1914

年に森林美学専攻で大学院に進学した。大学院在学中に「造営局」技士に任命されて退学し、1920年林業博士を取得した。彼は全国の官幣大社80余カ所のうち40余カ所を实地調査して境内図と樹木配置図を整理し作成した。この時、彼は神社の鎮守の森の理想を堺市所在の仁徳天皇陵の常緑広葉樹林に求めた。こうした立場は、鎮守の森の理想を針葉樹林に見た当時の総理大臣大隈重信¹⁷の反対に直面したが、上原は大隈を説得した。彼は1920年7月から1年3ヶ月に渡って欧米（アメリカ、イギリス、フランス、スイス、ドイツ）に私費留学し、1924年4月に東京高等造園学校（東京農業大学造園科学科の前身）を創立して初代校長となり、翌年の1925年には「社団法人日本造園学会」を創設して学会誌『造景学雑誌』を発刊した。

このように明治神宮造営に携わった主要人物のほとんどが西洋を幅広く経験した国際人であったという点は、明治神宮の下絵として和魂洋才が下敷きになっていたことをよく示している。明治神宮造営の初期立案段階において先導的役割を果たした渋沢栄一と阪谷芳郎もまた例外ではなかった。渋沢は1867年にパリ万国博覧会に出席した徳川昭武の視察団に随行して会計を担当した¹⁸。渋沢は帰国後、近代日本の経済界と実業界を牽引しながら明治神宮造営事業をリードした。また後日、渋沢の婿になった阪谷¹⁹は1912年、東京市長に就任して明治神宮を公園のように作らねばならないと主張し、資金助成に重要な役割を果たしたが、その背景にはアメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなどの西欧文明に対する直接的な体験が下敷きになっていた。特に明治神宮資金助成のノウハウは、彼が経験した「カーネギー国際平和基金」をベンチマーキングしたものだった。彼は「カーネギー国際平和基金」日本調査会を設立し、会長となって組織を運営したが、これは「奉賛会」運動を展開する良い指針となった。

一方、外苑を代表する象徴的施設として明治天皇の治績を記念するために建てられた「聖徳記念絵画館」からも、和魂洋才の性格が垣間見られる。「覚書」では言及されなかったが、東京帝国大学教授の三上参次委員が「明治時代歴史画記念館」を提案したが、これが「聖徳記念絵画館」として実を結んだのである。1917年5月に「奉賛会」は画題選定に関する委員及び特別顧問の規定を設け、同年7月に維新史料編修事務局において第1回委員会が開催された。そののち洋画家の五姓田芳柳に画題考証図の作成を依頼し、こうして完成した考証図に立脚して、委員会は1918年9月の第12回委員会で最終的な方針を提出した。このような過程を経て1921年に決定された80作品の主題は、大部分が明治維新以後に進行した近代日本国家の建設過程と帝国日本の確立過程を描いたものだった。

それぞれ奉納者が異なるこの80個の作品は、大きく分けて1号「御降誕」から40号「初雁ノ御歌」までの日本画40点と、41号「グラント將軍ト御對話」²⁰から80号「大葬」までの洋画40点によって構成されている。このうち日本画の場合は、おおむね巡行や伊勢神宮参拝など、明治天皇周辺と明治維新をめぐる主題が中心をなす。これに比べて洋画の場合は、日本が遂行した帝国主義戦争、「憲法発布式」（51号）、「軍人勅諭」（45号）、「教育勅語下賜」（55号）、「靖国神社行幸」、「日韓合併」（77号）²¹など、国家神道体制と天皇制イデオロギーの確立と関連した主要な政治、軍事、外交事件が中心となっている。

このほか外苑には「明治神宮外苑競技場」（現、国立競技場）が建立され、大正時代から

昭和初期まで、戦前日本の唯一の総合体育大会が開催された。これは内務省の発案によって開始された近代日本天皇制体制下の体育・スポーツの総決算として、第1回と第2回は、「明治神宮競技大会」、第3回から第9回までは「明治神宮体育大会」、第10回から第12回までは「明治神宮国民体育大会」、第13回は「明治神宮国民錬成大会」と名称が変わった。皇族の大部分が動員されたこの体育大会は、政治的、社会的、国民統合システムの重要な一環をなしており、1939年の第10回大会からは国民精神総動員体制の強化を目的として開催された。以後、第11回大会からは海洋競技と銃剣道の種目が含まれ、第12回大会では手榴弾投擲、銃剣競技、武装競争、行軍などの軍事訓練も導入された。(権學俊、2014: 161)

いずれにせよ外苑は、外見上は西洋式公園の形式[洋才]を取ったが、日比谷公園などとは違って、実質的には国体[和魂]観念の教化空間だった。たとえば「聖徳記念絵画館」は「帝国日本の栄光を明治天皇という個人のカリスマによる個人的光榮に置換させるための装置」(パク・サムホン、2013)であり、「明治神宮外苑競技場」はいま述べたように軍事訓練の場として活用されたかと思えば、1943年10月21日に学徒出陣大会が開かれるなど、昭和ファシズムによる国民動員の空間に変質していった。

今日、外苑は行政上あくまでも明治神宮という神社の一部であり、公園ではない。ところが近代日本における公園[洋才]は、出現当時から寺院と神社[和魂]と結びついていた。たとえば浅草公園は浅草寺、上野公園は寛永寺、深川公園は、富岡八幡宮などのように寺社の境内が公園として造成された事例が少なくない。1903年に開園した日比谷公園は寺社と関係のない日本初の西洋式公園であるが、明治神宮外苑もまた事実上、西洋式公園として造成された。でありながら今日、行政上としては公園ではなく、あくまでも明治神宮の境内として規定されている(山口輝臣、2005: 204-205)。あるいはこの曖昧性、境界性、混種性(ハイブリッド)こそ、土着的近代性の典型的標語である和魂洋才の本質かもしれない。

IV. 終わりに：土着的近代化のハイブリッド的陰画

「日本固有の自然発生的な民族宗教」という今日の神道の語法は、近代期に新たに作られた

伝統である。これに関連して民俗学者の折口信夫は明治神宮を「新神道の顕現」と規定し、「神道の将来の姿をいち早く表はしたものが明治神宮の中に存在するからである。」(折口信夫、1965: 235-236)と述べた。彼は明治神宮に日本と東京の未来を見た。確かに明治神宮はその他の近代創建神社と重要な点で明確な差別性を示している。実際に、明治天皇を記念するために初めから必ず神社を立てなければならなかった必然性はなく(菅浩二、2015: 148)、またそこに必ず人工林まで作らねばならなかったわけでもない。もちろん人工林の発想は神社の鎮座地が東京に決まることによって出てきたものだが、他の創建神社と違ってそこに必ず西洋式公園(外苑)を造成する必要があったわけではない。それでも明治神宮は立案初期から内苑と外苑として構想され、そのように実現した。それは近代日本が歩

んで行った土着的近代化の標本、すなわち和魂洋才の構造を象徴的によく示している。

その和魂洋才の特徴を現代的な感覚によって表現した言葉の一つとして、「ハイブリッド」を挙げることができると思う。ハイブリッドとは、互いに異なる種が混ざることの意味する雑種、混種、混成、混用、または互いに異なる異質なものが結合して混ざることによって新しい系統が創出される過程や、対立的であった領域間の境界が曖昧になって互いにその境界を行き来することを意味する語である（イ・ノミ、2012：143）。和を日本の共同体的原理であり人倫的合一と見なした和辻哲郎（1962：115）、これを借用した『國體の本義』の和の言説²²、加藤周一の有名な「雑種文化論」（加藤周一、1974）、または丸山眞男（1998：63-67）が言う「精神的雑居性」から「世界において日本文化の位置と役割は、まさに借用と統合、独創と混合の反復」（レヴィ・ストロース、1988：74）と理解したレヴィ＝ストロースの日本論に至るまで、多くの論者はそれぞれ異なる脈絡から、日本をこうしたハイブリッド文化の典型と理解した。

明治神宮もまたハイブリッド的近代性の代表的な表象と言える。しかし厳密に言えば、それは土着的近代化のハイブリッド的陰画とすべきである。どのような点で陰画なのか？この問いに対する一つの答えを、明治天皇聖徳論と明治神宮をめぐる多彩な道義の言説²³の本質から探ることができる。その中で最も代表的なものとして、今泉佳子は「青年団」の父田澤義鋪^{よとばる}（1885-1944）²⁴の道義言説に注目している。今泉は「神道の近代化なら明治神道から学べ」という神道思想家の葦津珍彦^{あざひひこ}（1909-1992）の主張を想起させながら、明治神宮造営の原点の一つを「道義国家日本」の将来と理想を力説した田澤の行動理念を挙げている。田澤は「青年団」の集团的修養によって日本を道義国家にしようという理想を抱いていた。道義国家日本の完成こそ、田澤の生涯にわたる理想であった。彼はカミ（神）も天皇も国民も、みな道に通じるものでなければならないと考えた。次のような田澤の言及からもわかるように、彼が「青年団」と明治神宮造営に献身したのはカミ信仰や軍国主義思想から出発したものではないということだ（今泉宜子、2013：102）。

海外発展？それが何だ。もし日本民族の情感と道義とが永久にこのまゝであるとするならば、それは発展どころか、恥辱の拡大であり、民族的怨恨の種をまきちらすに過ぎないのではないか。それでは地図の上ではどんなに発展しようとも、遠からず国の基礎がゆらぐであろう。道義なくして何の国家だ。日本は東洋のならず者にならない。そのために今何よりも大事なことは、国民性を人類的・世界的立場に立って矯め直すことだ。」（下村湖人、1992：32）

田澤が積極的に支援した「修養團」（1906年創設）の創立者である蓮沼門三（1882-1980）もこれと似た口調で、『道の国日本の完成』に次のように記している。

一日も早く道の国日本を完成して、暗黒世界を明るい世界に転ぜねばならぬのであります。然し乍ら茲に注意せねばならぬことは、我が国民が自惚れて、自分の国だけ誇称し、他の国を軽侮したり、世界遍照の大理想を持つ我が国は、世界を統一すべき特権を有するものだと得意になることは、却つて、皇国を滅ぼす素因となるものであります。道の国は絶対に軍国主義ではありません、征服主義ではありません。」（蓮沼門三、1926：32）

田澤と蓮沼の表現を借りれば、日本は「民族的な怨恨の種」を播いた「東洋の不良輩」になって「皇国を滅ぼす」結果を生み、これによって近代日本の道義言説は、「近代という挫折」(高坂史朗、2007)へと至るイデオロギー的虚構であったことが明らかとなった。ドナルド・キーンが『明治天皇』において聖徳論の虚構性を赤裸々に指摘(ドナルド・キーン、2002: 517)したのも、イデオロギー的虚構性を見透かしたためだろう。聖徳論に根ざした明治神宮の和魂洋才を土着的近代化のハイブリッド的陰面と表現したのは、まさにこのような意味からである。

今日の明治神宮は「初詣の最大の名所」という呼称がよく示すように、日本を代表する聖地の一つである。「しかし、おそらく新年の祝福を願ってその神社に参拝するとき、そこに祀られている天皇の存在を思い浮かべる人はほとんどいないのではないかと思う。(中略) 京都にある明治天皇の陵墓は探す人の影さえ閑散としているほどである。」(ドナルド・キーン、2002: 511)。また最近の明治神宮は「パワースポットブームの象徴」(岡本亮輔、2015: 169)と言われたりもする。しかし、この時パワースポットとして注目されるのは内苑の泉である「清正の井戸」(清正井)²⁵だけで、明治神宮本殿ではない。現象と本質との間には、常に隙間が存在するはずだ。先に明治神宮の空間構造を中心に喚起してみた日本の土着的近代化にも、随所にそのような隙間が隠されている。

参考文献

- 고사카 시로(2007), 『근대라는 아포리아』, 야규 마코토·최재목·이광래 옮김, 이학사.
- 김성근(2016), “메이지 일본의 과학과 제국주의 : 스기우라 주고(杉浦重剛)의 ‘이학종’(理學種)을 중심으로”, 『동서철학연구』 82, 한국동서철학회.
- 도널드 킨(2002), 『明治天皇』 하, 김유동 옮김, 다락원.
- 마루야마 마사오(1998), 『일본의 사상』, 김석근 옮김, 한길사.
- 박규태(2017), 『일본 신사(神社)의 역사와 신앙』, 역락.
- 박미경(2004), “일본고전에 보이는 ‘和魂’의 정의와 어의의 변천”, 『동아시아 고대학』 9.
- 박삼현(2013), “메이지신궁과 제국일본의 국체(國體) 공간”, 『제국일본과 식민지 조선의 근대도시 형성』, 심산.
- 別所興一(2003), “橋本左内の 학문관과 화폐경제인식”, 『한국실학연구』 5, 한국실학학회.
- 신현승(2010), “동아시아 근대사상의 내셔널리즘과 트랜스내셔널리즘”, 아연 워킹페이퍼 시리즈 No.18, 고려대학교 아세아문제연구소.
- 이광래(2005), 『일본사상사연구: 습합·반습합·역습합의 일본사상』, 경인문화사.
- 이노미(2012), “일본 하이브리드 문화의 원천과 전승 양상”, 『인문과학』 49.
- 임경택(2016), “화혼(和魂)의 실체와 양재(洋才)의 실천에 관한 고찰”, 『일본문화연구』 58, 동아시아일본학회.
- 今泉宜子(2013), 『明治神宮』, 新潮選書.
- 今泉宜子(2015), 『明治神宮と青年團の造營奉仕』, 全國青年團OB會.

- 岡本亮輔(2015), 『聖地巡禮』, 中公新書.
- 植手通有校注(1971), 『佐久間象山』, <日本思想大系 渡辺崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内>, 岩波書店.
- 折口信夫(1965), “新神道の顕現”, 『神道史研究』13, 神道史學會.
- 加藤周一(1974), 『雜種文化』, 講談社.
- 姜海守(2014), “明治神宮の「道義」概念”, 『宗教研究』87巻 別冊.
- 權學俊(2014), “近現代日本社會における天皇制とスポーツに関する一考察”, 『日本研究』21.
- 佐藤一伯(2007), “明治聖徳論研究の課題と展望：明治神宮創建の神道學的理解に向けて”, 『宗教研究』81(1).
- 塩田昌弘(2005), “聖徳記念繪畫館についての一考察”, 『大手前大學社會文化學部論集』6.
- 下村湖人(1992), 『この人を見よ：田澤義譜の生涯』, 田澤義譜顯彰會.
- 白川琢磨(2007), “神佛習合と多配列クラス”, 『宗教研究』353.
- 菅浩二(2015), “明治神宮が<神社>であることの意義”, 藤田大誠他編, 『明治神宮以前・以後：近代神社をめぐる環境形成の構造轉換』, 鹿島出版會.
- 田中智學(1927), 『明治大帝論』, 天業民報社.
- 田中智學(1943), 『国体の権化 明治天皇』, 天業民報社.
- 戸澤行夫編(2002), <福澤諭吉著作集>4, 慶應義塾大學出版會.
- 蓮沼門三(1926), 『道の国日本の完成 さ々ぐる魂』, 修養團.
- 藤田大誠他編(2015), 『明治神宮以前・以後』, 鹿島出版會.
- レヴィ・ストロース(1988), “世界の中の日本文化：混合と独創の文化”, 『中央公論』103(5).
- 丸山眞男(1995), “福澤における實學の轉回”, 『丸山眞男集』3, 岩波書店.
- 明治教育史研究會編(1983a), 『杉浦重剛全集』1, 思文閣.
- 明治教育史研究會編(1983b), 『杉浦重剛全集』2, 思文閣.
- 明治神宮外苑編(2016), 『聖徳記念繪畫館オフィシャルガイド』, 東京書籍.
- 文部省編(1937), 『國體の本義』.
- 山口縣教育會編(1935), 『吉田松陰全集』5, 岩波書店.
- 山口輝臣(2005), 『明治神宮の出現』, 吉川弘文館.
- 山口宗之校注(1971), 『横井小楠』, <日本思想大系 渡辺崋山・高野長英・佐久間象山・横井小楠・橋本左内>, 岩波書店.
- 和辻哲郎(1962), 『日本倫理思想史』1, 『和辻哲郎全集』12, 岩波書店.

* 編集者注：本論文は『韓国宗教』（円光大宗教問題研究所）・『靈性と平和』（東アジア＜靈性＞・＜平和＞研究会）各発行者の承諾のもと、『韓国宗教』43輯（2018年2月15日刊行）に掲載された論文（韓国語）を、広く日本語読者層に提供する目的で、日本語に翻訳したものである。

1 近代日本の創建神社に関しては朴奎泰（2017：168-177）を参照。

2 天皇を祭神として祀った近代の創建神社には、この他に樞原神宮（神武天皇）、宮崎神宮（神武天皇）、近江神宮（天智天皇）、平安神宮（桓武天皇）などがある。

3 シン・ヒョンスン（2010）は和魂を。狭義としては「儒仏的教養」、広義としてはその教養と渾融した日本人の伝統的な心情や精神として理解する。

- 4 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2543229>、国立国会図書館デジタルコレクションの『菅家遺誠』サイト参照。これと関連して1858年、九州の太宰府に建てられた「和魂漢才碑」は「中国の聖人らの道は革命の国風によって生じたもので、神国（日本）とは両立しない。この点を深く考え、どれほど中国の学問を学んでも、そこに心酔してはならないのである。日本の学問は古今にわたって天と人の道理を探究することにその要点がある。したがって和魂によって漢才を学ばなければ究極的な道をきわめることができないだろう。」と刻まれている。以降、全国の天満宮神社に和魂漢才碑が建てられるようになった。（イム・ギョンテク、2016：259-260）
- 5 「窮理の科なども、やはり程朱之意に符号し候へば、実に程朱二先生之格致之説は、之を東海西海北海に於て、皆準ずるの至説と存候義に御座候。」（象山書簡、植手通有校注、1971：330）
- 6 福井藩藩士。16歳の時に緒方洪庵の主宰する適塾に入門して、オランダ医学を原書で学び、『海国図誌』を読み、海外事情に明るかった。開国および公武合体の立場から尊王攘夷論と王政復古論に反対したが、井伊直弼の強行した「安政の大獄」で尊皇攘夷派とともに25歳の年齢で死刑となった。
- 7 丸山眞男はこの語から「思想的に[···]画期的な意味」を読み出した。すなわち、丸山は福沢諭吉の実学の特徴を「道理（倫理）から物理への転回」と要約する。つまり道理（倫理）が中心となる朱子学的文明から物理学（自然科学）が中心となる近代科学文明への転回と把握したのである。（丸山眞男、1995：121-124）
- 8 1876年、文部省留学生に選抜され、4年間英国で勉強し、帰国後1885年「東京英語学校」の設立に関与した。
- 9 杉浦を「近代化に逆行する国粹主義者」と見るキム・ソングン（2016：530-531）は、これと関連し、「福沢が朱子学的理を解体して物理を倫理の従属から解放させたとすれば、杉浦の思想は倫理が物理に従属する逆流現象を見せている。」と評価する。
- 10 これは39件の請願と13箇所の候補地の中から決定されたものであった。そのうち富士山の請願が22件で圧倒的多数であり、また筑波山と箱根山などの景勝地が多かった。要するに東京鎮座は景勝主義に対する縁故（由緒）主義の勝利とすることができる。
- 11 「青年団」の一日の日課は、午前4時起床、洗面後4時半から30分間かけて宮城遥拝、読経、座禅、黙想、訓話、体操などが行われ、5時朝食、午前6時から午後3時半まで工事、午後6時半から8時50分まで修養講座、9時半就寝前に読経、座禅、黙想などが行われた。「青年団」の造営奉仕に関しては（今泉宜子、2015）を参照。
- 12 1937年4月17日「奉賛会」解散当時の総収入金額は下賜金（30万円）と寄付金（700万名、約700万円）、その他の収入を合わせて11,938,000円であり、支出は約11,888,000円であった。「奉賛会」解散の10年前である1927年12月26日に明治神宮の氏子組織である「明治神宮祭奉祝会」が発足して敗戦まで続き、敗戦後には1946年に「明治神宮崇敬会」が創立され今日に至っている。
- 13 献金は内地だけではなく朝鮮、台湾、関東州、樺太（サハリン）でも募金された。募金が終了した1920年12月現在の献金総額は6,760,802.543円（朝鮮141,387.085円）に達した。一方、献金は内地から3,062本が集まり、朝鮮からも28本が渡ってきた。
- 14 伊東忠太、『野帳 第十三巻 英・米・日（滋賀・奈良・山口・愛媛・兵庫）』、日本建築学会建築博物館アーカイブ Web 頁（<http://news-sv.ajj.or.jp/da2/yachou/pdf/13.pdf>）参照。
- 15 神社建築様式に関しては朴奎泰（2017：303-310）参照。
- 16 日本人で最初にドイツで林学を勉強した松野潤が建設。
- 17 早稲田大学創業者。かつて「調査会」会長と「造営局」副総裁を務めた。
- 18 埼玉県の農家出身の渋沢は、7歳のとき水戸學に心酔した従兄に四書五経と『日本外史』などを学びながら尊王攘夷論に傾倒した。1863年には友人70余名と倒幕を期約して先ず挙兵して横浜の外国人居留地をすべて燃やそうという計画まで立てたが、その年7月に薩英戦争を見て攘夷決行の無謀さを知った。そののち従兄と一緒に京都に逃亡して幕府名門の御三家の一つである一橋家の家臣となった。この縁によって一橋家出身で幕府最後の15代将軍徳川慶喜が弟の昭武の随員に渋沢を推薦したのである。このように渋沢は過激な倒幕攘夷論者から幕府の随員に大転向をしたが、そこに大きな影響を与えた人物が、のちに渋沢と姻戚の縁を結ぶことになる儒学者の阪谷朗蘆であった。渋沢はパリ視察の後、留学を予定していた昭武とともに残って、幕府が崩壊するまでの2年余りフランスに滞在した。このとき渋沢は西欧資本主義の経済システム（証券、銀行など）と官民平等思想などから多くの示唆を受けた。帰国後の1878年に東京商法会議所（東京商工会議所の前身）を設立し初代会長を務めた。この商法会議所は不平等条約改正（1911年）に至るまで、民意を形成するための商工業者の世論機関として重要な役割を担った。渋沢は1909年に50余名の渡米業団の団長として3ヶ月間米国各地を訪問して、民間外交に力を注いだ。
- 19 上述した阪谷朗蘆の子。渋沢の推薦で徳川慶喜に『論語』を講義した。東京大学文学部卒業後、大蔵省に入り、44歳で大蔵大臣に昇り詰め、日清・日露戦争時には軍備を調達するなど、明治政府の財政担当

者として大いに活躍した。

- ²⁰ 個人的にグラント将軍と縁のあった渋沢が奉納した絵。これは1879年（明治12）8月10日に米国前大統領グラント将軍と明治天皇が茶屋（浜離宮内）で対談する様子を描いたものである。
- ²¹ 本来は韓日強制併合の調印式の場面が挙論されたが、両国が平和とともに進んで行くことを表現しようと、和服を着た日本女性と韓服を着た一般の朝鮮人が京城南大門付近を歩いている合併当時の風景を描写している（明治神宮外苑編、2016：120）。これは日本の帝国主義的な和魂を隠蔽する効果を内蔵している。
- ²² 「日本の建国の事実と歴史発展の跡を遡るとき、そこに常に発見されるのは、和の精神である。和は日本の根本的な道であり、サムライ精神に明らかに現れる。そこで武力は和のための武、すなわち神武である。また「むすび」は創造であるが、これはまさに和の力が現れたものである。」（文部省編、1937：10 筆者の要約）
- ²³ 皇祖皇宗の徳を礼賛し道義国家の実現を掲げた「教育勅語」はもちろん、明治天皇聖徳論を強調して、「日本は道義立國であり、日本国民は道義国民」であり、「明治神宮は皇室中心主義の根源であり、国体の美しさを示したもの」であることを力説した徳富蘇峰、戦争と至誠を媒介に「道の国、日本」を言った深作康文、教育の根本を道義立国の達成に置いた佐々木盛雄から、教育の根本を明治天皇を「道徳上の教師」と称賛した新渡戸稲造にいたるまで、近代日本には各種の道義言説があふれた。（姜海守、2014 参照）
- ²⁴ 東京帝国大学法学部に入学し政治学を専攻した。高等文官試験に合格して内務省官僚となり、1915年内務省「造営局」総務課長を務めながら「青年団」の活動に尽力した。
- ²⁵ この井戸の名称は「土木の神」と言われる加藤清正が掘ったものとして付けられたものである。